

## Mahābhāṣya ad P1. 3. 1 研究 (6)

小川英世

### 1.4.1.4. [BHĀṢYA]

[問い] しかし、どのようにして  $\sqrt{\text{pac}}$  などが〈行為〉を表示すると知られるのか。

[答え] これら [ $\sqrt{\text{pac}}$  など] の  $\sqrt{\text{kr}}$  との間の [意味間の] 〈同一基体性〉 (sāmānādhikaraṇya) [に基づいてそう知られる]。「彼は何をしているのか」 ( $\{\text{kiṃ karoti}\}$ ) (3rd sg. pres. P.) — 「彼は料理をしている」 ( $\{\text{pacati}\}$ )、  
「彼は何をするのだろうか」 ( $\{\text{kiṃ kariṣyati}\}$ ) (3rd sg. fut. P.) — 「彼は料理をするであろう」 ( $\{\text{pakṣyati}\}$ )、  
「彼は何をしたのか」 ( $\{\text{kim akārṣit}\}$ ) (3rd sg. aor. P.) — 「彼は料理をした」 ( $\{\text{apakṣit}\}$ ) [という問答に見られるように、両者の意味間には 〈同一基体性〉 が成立する]。

### [PRADĪPA]

「彼は何をしているのか」 ( $\{\text{kiṃ karoti}\}$ ) (3rd sg. pres. P.) — 「彼は料理をしている」 ( $\{\text{pacati}\}$ ): 〈一般〉と〈特殊〉の関係 (sāmānyaviśeṣabhāva) で [両者の意味が] 基体を同じくすること (sāmānādhikaraṇya) から、 $\sqrt{\text{pac}}$  などは特殊な〈行為〉 (kriyāviśeṣa) を表示するものであると理解される、という意味である。しかし、「彼は何をしているのか」と質問されて、「彼は [何も] していない。ただ単に座っているだけだ」 ( $\{\text{na karoty āsta eva kevalam}\}$ ) というように返答される場合には、〈ハタラキ〉一般 (vyāpāramātra) [の存在] は不可避的であるから、特殊な〈ハタラキ〉 (vyāpāraviśeṣa) を対象として質問が発せられている。一方 [この場合の] 返答は、[ある特定の] 特殊 [な〈ハタラキ〉] の排

除によって [意味をなす]、と理解するべきである。

## ノート (18)

(1) 術語「dhātu」の適用問題に関して、〈読み上げ〉に基づく術語規定の代案として、「〈行為〉(kriyā)を表示するものが〔「dhātu」と呼ばれる〕(kriyāvacaṇo dhātuḥ) という意味論的な定義規則が提案された (1.4.1)。いまこの定義規則を受け入れたとしよう。しかしながら、〈行為〉(kriyā) は  $\sqrt{kr}$  の表示対象であるとみなされるとしても<sup>143)</sup>、 $\sqrt{pac}$  などの表示対象であるとはみなされ難い。〈pac〉などの項目が「dhātu」と呼ばれるためには、それもまた〈行為〉を表示するものでなければならない。しかしどのようにして〈pac〉などの項目が〈行為〉を表示するものであることが知られるのか。当該 Bhāṣya の質問の意図はこのようなものである。この質問に対して、{kim karoti} — {pacati} といった問答において  $\sqrt{kr}$  の意味との間に〈同一基体性〉(sāmānādhikaranyā) が成立する<sup>144)</sup> ということを根拠に、〈pac〉などが〈行為〉を表示するものであるということが知られる、という回答が与えられる。これはいわば、「この木は何か」—「パナサである」という問答が成立する場合、「パナサ」が木の一種を表示するものであることが知られるというのと同じ構制である。ナーゲーシャは次のように説明している。

「その [問答] において、 $\sqrt{pac}$  などは、〈ハタラキ〉一般を表示する [項目] の〈特殊〉である (yo vyāpārasāmānyavācī tadviśeṣāḥ pacādayaḥ)。そして、「彼は何をしているのか」というこの [表現の] 意味は、「彼がしているところのもの、それは何か」(yat karoti tat kim) というように、特殊な〈ハタラキ〉を対象とする質問 (vyāpāravīśeṣaviśayaḥ praśnaḥ) である。そしてこのような場合、x に存するものとして質問の対象である〈行為〉—  $\sqrt{kr}$  という語の表示対象である〈行為〉— が理解されるとき、まさにその同じ x に存するものとして、答弁中の  $\sqrt{pac}$  という語の表示対象である〈行為〉が理解されるから、それら [ $\sqrt{kr}$  という語と  $\sqrt{pac}$  という語の意味]

の間には〈同一基体性〉がある。その〔ような〈同一基体性〉〕がある場合には、〈行為〉についての質問を生ぜしめる欲知は、まさに〈行為〉を対象とする答弁によって満たされるから、これら〔√pac など〕は〈行為〉を表示する〔と知られる。〕<sup>145)</sup>

ボタンジャリによれば、√kr̥ は〈行為〉一般 (kriyāsāmānya) を表示し、√pac などは特殊な〈行為〉 (kriyāviśeṣa) を表示する<sup>146)</sup>。〈行為〉一般を表示する√kr̥ を用いた {kim karoti} という質問は、「彼がしているところのもの、それは何か」というように〈行為〉の特定化を期待する。したがってその質問に対する答弁として機能する √pac の表示対象は特殊な〈行為〉であることになるのである。そして、このように √kr̥ との意味間の〈同一基体性〉に基づいて √pac などが〈行為〉の特殊を表示することが知られるという場合、{kriyāvacaṇo dhātuḥ} という意味論的な定義規則は、√kr̥ばかりではなく、√pac などをもカバーすることが可能となる<sup>147)</sup>。なぜなら、同定義規則は「〈行為〉 (kriyā) あるいは〈行為〉に遍充されるもののいずれかが「dhātu」と呼ばれる」ということを意図しているものと解されるからである。

(2) ところで当該 Bhāṣya 中に言及された {kim karoti} は〈行為〉についての質問 (kriyāpraśna) である。次の Bhāṣya を見よ。

「ひとは〈行為〉について質問されたならば (kriyām pr̥stah)、定動詞接辞で終わる項目 (tiṅanta) によって [答えを] 述べる。『デーヴァダッタは何をしているのか』 (kim devadattaḥ pacati) — 『彼は料理をしている』 (pacati) というように。[一方]〈実体〉について質問されたならば、「kr̥t」接辞で終わる項目によって [答えを] 述べる。『どっちがデーヴァダッタか』 (kataro devadattaḥ) — 『[何か] する者、盗みを働く者』 (yaḥ kāraḥ hāraka) というように。』<sup>148)</sup>

{kim karoti} によって〈行為〉自体を問うこと、さらにはそのような質問に対して {pacati} といった返答が可能となるのは、{kim} が kriyāviśeṣaṇa (副詞) であるからである。カイヤタは次のように説明を与えている。

「[この [文] における √kr̥ は、〈行為〉一般を表示している。その [文]

においては、特殊の確定的知解のために {kim} という語が kriyāviśeṣaṇa として起こっている。そして [それは] kriyāviśeṣaṇa であるから、[当該の] {kim} というこの [語形] は、目的格接辞 (dvitīyā[-vibhakti]) で終わる項目であり、しかも中性形である。そして [この文は] 文脈などの力から、〈行為〉についての質問 (kriyāpraśna) であると理解される。質問としては〈属性〉 (guṇa) ・ 〈実体〉 を対象としても可能であるから。たとえば、『織工はどんな [色の] 服を作っているのか。白かそれとも黒か』 (vāyakaḥ kiṃ śuklaṃ vastraṃ karoty atha kṛṣṇam)、また『[織工は] 何を作っているのか。ペチコートかそれとも上着か』というように。<sup>149)</sup>

カイヤタによれば、{kiṃ karoti} という質問の対象は、文脈によって〈行為〉〈実体〉〈属性〉のいずれでもあり得る。〈実体〉に関する場合それは「彼は何を作っているのか」という意味になり、〈属性〉に関する場合には「彼はどのような属性を有するものを作っているのか」という意味になり得る。このような場合、{kim} は〈目的〉を表示する目的格接辞で終わる項目である。これに対してそれが〈行為〉を対象とする質問である場合、{kim} は kriyāviśeṣaṇa として、文法的には次のような説明が可能である。次の解釈規則を見よ。

Paribhāṣā 「kriyāviśeṣaṇa は術語〈目的〉の適用を受け、中性形である。」

(kriyāviśeṣaṇānām karmatvaṃ napuṃsakaliṅgatā ca) <sup>150)</sup>

{kim} が kriyāviśeṣaṇa として〈行為〉の限定者を供給する項目として機能する場合、{kiṃ karoti} は、〈行為〉自体が疑念の対象として限定されて「彼はどんな〈行為〉をなしているのか」という意味となり得るのである。このように〈行為〉自体の特定化が求められる場合、{pacati} はその特定化の期待にまさしく適ったものとみなされる<sup>151)</sup>。

(3) 座行為 (āsana) もまた〈行為〉の一種である。論理的には {kiṃ karoti} という質問に対する {na karoti} という答弁は、〈行為〉一般の否定によって必然的にその一部である座行為の否定を含意する。したがって {na karoti} の後に {aste} と述定し得る余地はない。このような〈行為〉に関わ

る問答の実際はどのように説明されるのであろうか。この答弁中の制限詞〈eva〉が示唆しているところのものは、この〈eva〉によって排除されるものが座行為の上位概念ではなくそれと同レベルの特殊な〈行為〉であるということである。カイヤタによれば、我々は常に何らかの〈行為〉を行っており、「何もなさない」(na karoti) ということはある得ない<sup>152</sup>。そのような場合、{kim karoti} は、〈行為〉には進行行為 (gamana) とか、座行為 (āsana) とか、横臥行為 (śayana) とか種々あるがそれらのなかでどの〈行為〉を為しているのか、ということを図意することになる。したがってその答弁は、「他の〈行為〉をしている訳ではない。ただ座行為をなしているだけだ」というように、座行為以外の特殊〈行為〉の排除によって意味をなすことになるのである。

#### 1.4.1.5. [BHĀṢYA]

その〔ように、〈読み上げ〉に依存しない形で {kriyāvacaṇo dhātuḥ} というように術語「dhātu」に関する意味論的な定義規則が与えられた〕場合には—

vt. 3: 〈行為〉を表示するものが「dhātu」〔と呼ばれる〕という場合には、〔「dhātu」に〕「upasarga」<sup>153</sup>〔が先行しかつ〕接辞（「pratyaya」）〔が後続している項目、あるいは「dhātu」に〕接辞〔が後続している項目〕について〔それらは「dhātu」と呼ばれないという術語「dhātu」の〕禁止規定〔が言明されるべきである〕(kriyāvacaṇa upasargapratyaya-pratiśedhaḥ)。

〈行為〉を表示するものが「dhātu」〔と呼ばれる〕という場合には、〔「dhātu」に〕「upasarga」〔が先行しかつ〕接辞〔が後続している項目、あるいは「dhātu」に〕接辞〔が後続している項目〕について<sup>154</sup>、〔それらは「dhātu」と呼ばれない、という術語「dhātu」の〕禁止規定が言明されるべきである。〔「dhātu」に〕接辞が後続している項目 {pacati} (「彼は料理している」)、〔「dhātu」に〕「upasarga」が先行しかつ接辞が後続している項目 {prapacati} (「彼は料理しはじめている」)〔には術語「dhātu」

の適用可能性が結果する]。

[問い] しかし何故 [それらの項目に術語「dhātu」の適用可能性が] 結果するのか。

vt. 4: なぜなら [聞き手 (boddhṛ) は] 複合体 (saṃghāta) によって意味を理解するから (saṃghātenārthagateḥ)。

なぜなら、[聞き手は] 基体と接辞からなる複合体、基体と接辞と「upasarga」とからなる複合体によって意味を理解するからである。

### [PRADĪPA]

「複合体 (saṃghāta) によって」: [実際の言語運用の場で] 使用されるのは、他ならぬ複合体であるから、それが意味の担い手である [と an-  
vaya (肯定的共在関係) と vyatireka (否定的共在関係) に基づき確立される] <sup>155</sup>。しかし、「dhātu」は単独では使用されることはないから、単独の「dhātu」は意味の担い手ではない (ānarthakya)。

### ノート (19)

当該 Bhāṣya の議論とパラレルなものが、術語「prātipadika」定義規則 P1. 2. 45 arthavad adhātur apratyayaḥ prātipadikam に対する Bhāṣya に見いだされる。この規則は、「dhātu」・接辞・接辞で終わる項目以外の有意味な項目 (arthavat) が「prātipadika」と呼ばれることを規定している。この規則の適用に関して次のような問題が提起される。

[vt. 7: <有意味性> は [<vr̥kṣa> という項目] には妥当しない。なぜなら、それ単独で [意味を] 表示することはないから (arthavattā nopapadyate kevalenāvacanāt)。… [すなわち] 単独の <vr̥kṣa> という項目から意味が理解されることはない (na kevalena vr̥kṣaśabdenārtho gamyate)。

[問い] それでは何から [意味が理解されるのか]。[答え] 接辞が後続している [<vr̥kṣa> という] 項目から [意味が理解される] (sapratyayakena)。

vt. 8 : 否むしろ [このような誤謬は] ない。なぜなら、[基体は] 接辞と常に結びついているから。[したがって基体が] 単独で使用されることはない (na vā pratyayena nityasambandhāt kevalasyāprayogaḥ)。…これら基体と接辞という二つのものは常に結びついている。[基体は] 接辞と常に結びついているから、[基体が] 単独で使用されることはないであろう。

[反論] …君に「〈有意味性〉は [〈vr̥kṣa〉 といった項目] には妥当しない。なぜなら、それ単独で [意味を] 表示することはないから」というように異を唱えたのに、君は、[基体が] 単独で使用されることはないことに対する理由を述べている。しかしもちろん実際このようなことを考えた上で [君に] 全体が意味を表示するために使用されるから、部分が [意味を有するということに対する根拠は] 知られていない (samudāyas yārthe prayogād avayavānām aprasiddhiḥ) <sup>156)</sup>、と異を唱えたのである。」<sup>157)</sup>

ここで考慮されるべきは、〈有意味性〉の確立と次のような言語運用規則の関わりである。パタンジャリによれば実際の言語運用に関して「基体それ自体単独で使用されてはならない。接辞それ自体単独で使用されてはならない」<sup>158)</sup> という言語使用上の制限 (prayoganiyama) がある。実際の言語運用の場では、{vr̥kṣaḥ} (〈vr̥kṣa〉+sU ; 「prātipadika」 + 「pratyaya」)、{pacati} (√pac+ŚaP+tiP ; 「dhātu」 + 「pratyaya」)、{prapacati} (pra+√pac+ŚaP+tiP ; 「upasarga」 + 「dhātu」 + 「pratyaya」) というように、基体はそれ自体単独では使用されない。使用されるのは基体・接辞などからなる複合体 (集合) である。ところで、〈有意味性〉は実際の言語運用の場で使用されている項目についてのみ確立される。なぜなら、「意味 X を表示する項目の使用なくして、X の意味の理解はない」<sup>159)</sup> と言われる通り、そもそも使用されない項目についてその意味を語ることはできないからである。カイヤタはこの点を次のように述べている。

「それ [有意味性] は、まさに文に、あるいは単独の語 (pada) に、それらが世間で使用されているもの (prayujyamāna) である限りにおいて妥当する。しかし、基体の部分は、それ単独では使用されないから [それには

有意味性は妥当] しない。なぜなら、音素と同じようにそれは言語活動に供されないのである。」<sup>160)</sup>

さて、術語「dhātu」に関する {kriyāvacaṇo dhātuḥ} という意味論的定義規定が与えられたとしよう。その場合、実際の言語運用の場では〈行為〉を表示するために {pacati} {prapacati} といった「dhātu」と接辞からなる複合体、あるいは「upasarga」と「dhātu」と接辞からなる複合体が使用され、基体である「dhātu」単独の使用はみられない。したがって、それら複合体こそが〈行為〉の表示者とみなされねばならず、結果としてそれらが術語「dhātu」を得ることになる。そして、このような難点を回避するためには、それらの複合体は「dhātu」とは呼ばれない、という禁止規定が設定されなければならないのである。しかし、これはカイヤタが明確に述べているように、〈有意味性〉の確立を実際の言語使用の場に限定することから帰結することである。〈有意味性〉の確立を実際の言語使用の場から言語分析の場、すなわち文法学の場へ移した場合に、複合体の部分としての「dhātu」に関してそれがある特定の意味の担い手であるということが確立され得る。その方法は Bhāṣya 1. 4. 1. 7. 3 に述べられるであろう。

#### 1. 4. 1. 6. [BHĀṢYA]

vt. 5: さらに、√as・√bhū・√vid<sup>161)</sup> は「dhātu」と [呼ばれる、と言明さるべきである] (astibhavatividyatīnāṃcadhātutvam)。

さらに、√as・√bhū・√vid は「dhātu」と呼ばれる、と言明さるべきである。なぜなら、君は [√pac などに対する術語「dhātu」適用のために、それらが〈行為〉を表示するということを確立するために、] √kr [の意味] と √pac など [の意味] との〈同一基体性〉を提示したが、しかし、それと同じような形で √as などに関して [その意味の √kr [の意味] との〈同一基体性〉が] 提示されるということはないからである。実に、{kim karoti} という [質問に対して] {asti} (「彼は在る」)<sup>162)</sup> というように [返答される] ことはない。



## ノート (20)

Bhāṣya 1. 4. 1. 4 において、 $\sqrt{pac}$  や  $\sqrt{path}$  などの個別的な項目に対する術語「dhātu」の適用の前提として、それら個別的な項目の〈行為〉表示性をいかに確立するかということが問われ、それに対する答えとして、それら個別的項目の〈行為〉表示性はそれらの  $\sqrt{kr}$  との意味間の〈同一基体性〉に基づいて確立されることが述べられた。いまここで問題となるのは、存在・生成を意味する  $\sqrt{as}$ ・ $\sqrt{bhū}$ ・ $\sqrt{vid}$  には、同じ方法によって〈行為〉表示性は確立され難いということである。一般に「彼は何をしているのか」(kim karoti) という〈行為〉を対象とする質問に対して「彼は在る」(asti) という返答を期待することはできないからである。この  $\sqrt{as}$ ・ $\sqrt{bhū}$ ・ $\sqrt{vid}$  をもカバーし得る意味論的な「dhātu」の術語規定をめぐる問題は P 1. 3. 1 に対する Mahābhāṣya の主要テーマのひとつであり、Bhāṣya 1. 4. 2 以下に論じられることになる。

## 1.4.1.7.1. [BHĀṢYA]

vt. 6A: 異なる [意味を表示する] 基体があるとき、接辞の意味は異ならないから (pratyayārthasyāvyatirekāt prakṛtyantareṣu)。

異なる [意味を表示する] 基体があるとき、接辞の意味は異ならないから、[複合体ではなく] まさに [基体である] 「dhātu」こそが〈行為〉を表示する (dhātur evakriyām āha)、と我々は考える。[次の例を見よ。] {pacati} (「彼は料理している」) — {paṭhati} (「彼は誦している」)

[この例においては] 基体の意味はそれぞれ異なるが、接辞の意味は同一である (prakṛtyartha 'nyas cānyas ca pratyayārthaḥ sa eva)。

## 1.4.1.7.2. [BHĀṢYA]

vt. 6B: そして、異なる [意味を表示する] 接辞があるとき、「dhātu」の意味は異ならないから (dhātoś cārthābhedāt pratyayāntareṣu)。

そして、異なる〔意味を表示する〕接辞があるとき、「dhātu」の意味は異なるから、〔複合体ではなく〕まさに〔基体である〕「dhātu」こそが〈行為〉を表示する、と我々は考える。〔次の例を見よ。〕{paktā} (「料理人」) — {pacanam} (「料理手段」) — {pakaḥ} (「料理行為」)<sup>163</sup> [この例においては] 接辞の意味はそれぞれ異なるが、基体の意味は同一である (pratya'yārtho 'nyaś cānyaś ca bhavati prakṛtyarthaḥ sa eva)。

### ノ ー ト (21)

Bhāṣya 1. 4. 1. 7. 1 から1. 4. 1. 7. 3は、「dhātu」を部分として含む複合体のうち、「dhātu」と接辞からなる複合体に関して、{kriyāvacaṇo dhātuḥ} という意味論的規定の過大適用を、いかにして回避するかということを主題としている。そのような主題下に当該 Bhāṣya 1. 4. 1. 7. 1-2 は、いかにして複合体を構成する部分に〈有意味性〉が確立されるかを示している。バルトリハリ次の言明は、まさにこの問題を捉えたものである。

「〈kūpa〉 (「井戸」) 〈sūpa〉 (「スープ」) 〈yūpa〉 (「祭柱」) に [同一の] 意味の継起 (anvaya) は経験されない。したがってまさに複合体そのものが [互いに] 異なる意味を表示すると理解される。」<sup>164</sup>

ここにみられる基底的な考えは、二つの音連鎖に関して、ある同形の項目の継起があるときに、もし同一性が認められるある意味の継起があるとするならば、意味の相違はその連鎖中の残余の項目の差異に基づくというものである<sup>165</sup>。〈kūpa〉などは同形項目〈ūpa〉を含んでいる。しかし継起する同一の意味は見いだされない。したがって意味の差異は残余の音 /k/ などに基づいているのではなく〈kūpa〉などの複合体自体が意味の差異の根拠であるとみなされる。これに対して、「dhātu」と接辞の複合体の場合には、同形項目の継起に対応して同一性 (avyatireka, abheda) が認められる意味の継起がある。この場合、意味の差異はそれぞれの同形項目の対項目の差異に求められるであろう。したがって、このような場合には複合体自体ではなくそれを構成する「dhātu」と接辞の各部分に〈有意味性〉が確立されることになるのである。

## 1.4.1.7.3.1. [BHĀṢYA]

しかし、[そもそも] これは基体の意味である、これは接辞の意味である、とどのようにして知られるのか。

vt. 6C : ところで、[これが基体の意味であり、これが接辞の意味であるということは] anvaya (肯定的共在関係) と vyatireka (否定的共在関係) に基づいて確立される (siddhan tv anvayavyatirekābhyām)。<sup>166)</sup>

[このことは確立される。[問い] どのように。]<sup>167)</sup> [答え] anvaya と vyatireka に基づいて [確立される]。[問い] この anvaya あるいは vyatireka とは何か。[答え] いま次のように {pacati} (「彼は料理している」) と言われたとき、一定の言語項目 (śabda) が聞かれる。/c/ 音で終わる <pac> という項目と接辞である <ati> という項目とである。意味もまた一定のものが理解される。<軟化作用> (viklitti) と <行為主体性> (kartṛtva) と <単数性> (ekatva)<sup>168)</sup> とである。[次に代わって] {paṭhati} (「彼は誦している」) と言われたときには、ある一定の言語項目が消滅し、ある一定の [言語項目] が出現し、ある一定の [言語項目] が継起する (kaścic chabdo hīyate, kaścic upajāyate, kaścic anvayī)。すなわち、<pac> という項目が消滅し、<paṭh> という項目が出現し、<ati> という項目が継起する。意味もまた一定のものが消滅し、一定のものが出現し、一定のものが継起する (artho 'pikaścic dhiyate, kaścic upajāyate, kaścic anvayī)。すなわち、<軟化作用> が消滅し、<読誦作用> (paṭhikriyā) が出現し、<行為主体性> と <単数性> とが継起する。

それら [の意味] について我々は次のように考える。すなわち、消滅する意味は、消滅する項目の意味であり、出現する意味は出現する項目の意味であり、継起する意味は、継起する項目の意味である (yaḥ śabdo hīyate tasyāsāv artho yo'rtho hīyate, yaḥ śabdaḥ upajāyate tasyāsāv artho yo'rtha upajāyate, yaḥ śabdo'nvayī tasyāsāv artho yo'rtho'nvayī)、と。

[PRADĪPA]

「〈ati〉という項目と」：たとえこの [〈ati〉という項目] は [vikaraṇa ŚaP と定動詞接辞 tiP からなる] 接辞の集合 (pratyayasamudāya) であるとしても、[パタンジャリはここでは] 基体の部分を理解せしめることを意図しており、接辞部分の考慮に関心はないから、このように言われている<sup>169)</sup>。あるいは、先師たちのなかに [この] 〈ati〉を接辞として概念的に措定していたものがいたから、それに配慮してこのように言われている。

### ノート (22)

Bhāṣya 1. 4. 1. 7. 1-2 における複合体の構成部分に関する〈有意味性〉確立の問題は、「dhātu」、接辞といった各項目の個別的な有意味性を前提していた。実際の言語運用の場で使用される項目は複合体であるとしても、パーニニ文法の派生組織は基体と接辞の区分を前提している。ここに、実際の言語運用において使用される複合体 (一連の音連鎖) を分節しそれから有意味単位を抽出する方法が明らかにされる。その方法とは、anvaya と vyatireka に基づく推理である<sup>170)</sup>。これは一般的に言えばつぎのようなものである。

ある言語項目 X とある意味 M があるとしよう。この X と M に関して、X があるとき、M が理解される (anvaya) : X がなくとき M が理解されない (vyatireka)、ということが妥当するとき、X は M の理解に対する原因とみなされ、意味 M はその言語項目 X に配当される<sup>171)</sup>。

{pacati} に関しては、この方法によって、基体 〈pac〉と接辞 〈ati〉という有意味単位が抽出され、前者には軟化作用という特定〈行為〉が、後者には〈行為主体性〉と〈単数性〉がそれぞれの意味として配当されることになる。

この分節化理論の詳細については、Cardona [1967-68] : [1981]、その方法論的問題点については小川 [1993] に詳しく、ここでは立ち入っては論じない。

#### 1.4.1.7.3.2. [BHĀṢYA]

【反論】この言明は問題をはらんでいる。なぜなら、複数の言語項目が同

一のものの意味するということがあるから。たとえば、〈indra〉〈śakra〉〈puruḥūta〉〈purandara〉[はすべて Indra 神を表す名称であり]、〈kandu〉〈koṣṭha〉〈kusūla〉[はすべて鍋を表す名称である]。さらに、単一の言語項目が複数の意味をもつということがある。たとえば、〈akṣa〉[は軸・賭博等々を意味し]、〈pāda〉[は足・四半分等々を意味し]、〈maṣa〉[は豆・金の重量等々を意味する]。[反論者に対する問い] だからどうだということか。

[君の謂わんとするところのものは、このように複数の項目が単一のものを意味したり、単一の項目が複数の意味をもつという場合] 〈有意味性〉の確立はうまくいかない、ということなのか。<sup>172)</sup> [反論者の答え] 我々は、[特定項目の] 有意味性は確立されない、とは言わない。実に、有意味性 [の確立の手段について] それはまさに anvaya と vyatireka に基づいて [確立されることは] すでに説かれた。[しかし] その [ように複数の項目が単一のものを意味したり、単一の項目が複数の意味をもつという] 場合、どうして「これは基体の意味であり、これは接辞の意味」であるとこのように [言えよう]。反対に、基体だけが [基体の意味と接辞の意味の] 両意味を表示すべきである、あるいは接辞だけが [それら両意味を表示すべきで]、とどうして [言え] ないことがあろう。

【答論】もしこのようであるとすると、これらは不特定表示語 (sāmānyasabda) であることになろう。そして (ca) 不特定表示語は特殊 [を知らしめる項目との共表現 (samabhiṣyāhāra)]<sup>173)</sup> あるいは文脈 (prakaraṇa) なくして特殊に自己の場を占めない (sāmānyasabdāś ca nāntareṇa prakaraṇaṃ viśeṣaṃ vā viśeṣeṣv avatiṣṭhante)。しかし、実際、{pacati} と言われたとき、{pacati} という語 [の基体 √pac]<sup>174)</sup> は必ず [その表示] 本性に従ってある特定の特殊を指示する。したがってこれらは不特定表示語ではない、と我々は考える。不特定表示語でないとするなら、基体は基体の意味を表示し、接辞は接辞の意味を表示する [と確立される]。

「だからどうだというのか。…〈有意味性〉の確立はうまくいかない」：基体だけが〈行為〉と〔〈行為主体〉といった〕〈能成者〉を表示する場合には、基体が〈行為〉を表示するということがまさに確立される。「接辞だけが」：さらに〔接辞だけが基体の意味と接辞の意味の両意味を表示するとするなら〕、その場合には基体は〈行為〉を表示するものではないことになろう。

### ノート (23)

anvaya · vyatireka は、一つの言語項目に一つの意味が対応する場合に有効である<sup>175)</sup>。〈akṣa〉や同義語 (paryāya) の場合には、anvaya と vyatireka に〈逸脱〉(vyabhicāra) が見られる。ナーゲーシャは次のように述べている。

「〈akṣa〉などの語の場合には、その語がまさにあるとき、その意味は理解されず、別の意味が理解されるから、そして、同義語の場合には、その語がなくてもその意味が理解されるから、このような anvaya · vyatireka は〔〈有意味性〉を〕決定するものではない。」<sup>176)</sup>

このように「Xがあっても、Xの意味は理解されず (anvavyabhicāra)、XがなくてもXの意味が理解される (vyatirekavyabhicāra)」という場合、anvaya · vyatireka によって言語項目 (X) と特定の意味との一義的な対応付けは不可能である。いま {pacati} から〈行為〉と〈能成者〉という二つの意味が理解されるとしよう。さてこの場合、次のようにも考えられよう。すなわち、基体 √pac がこれらをすべて表示する、あるいは接辞 <ati> がこれらをすべて表示する。そしていずれの場合も他方の使用は、言語使用規則のための文法的形式性によって正当化される<sup>177)</sup>、というように。しかしこのような場合、前者においては、基体に関してその〈行為〉表示性は定立できても、接辞に関して上記の方法に基づいて〈行為主体〉をその意味として指定することはできないし、一方後者においては、基体に対して〈行為〉をその意味として配当することはできない、という困難に直面する。そしてこのような不都合を、基体あるいは接辞は〈行為〉と〈行為主体〉のいずれをも表示し得ると

いう前提を認めた上で回避し得る唯一の方法は、基体と接辞を「不特定表示語」とみなすことである。

「不特定表示語」とは、たとえば白とか黒という属性をもつすべての実体に適用される <śukla> <kṛṣṇa> といった属性表示語 (guṇavacana) である。

{śuklah} (「白いもの」と言われた場合、「白いもの、いったいそれは何か」という特殊化の期待が生ずるが、それが何かは、特殊を供給する項目との共表現 {śuklo ghaṭah} (「瓶という白いもの」) あるいは文脈によって確定される 178)。しかし、基体あるいは接辞がこのような「不特定表示語」であるとすると、それらが特定の意味、すなわち、<行為> あるいは <行為主体> を表示するためには、特定化の因である特殊を知らしめる項目との共表現あるいは文脈に依存せざるを得ないことになる。しかしながら、基体あるいは接辞からは文脈などに依存せず、特定の固有の意味が理解される。ナーゲーシャは次のように述べる。

「実にあなたの論法では、基体は自己の意味ならびに接辞の意味一般を表示する。その場合、文脈などなしに、自己の意味単独の認識は決して得られないであろう。しかしながら、その [自己の意味単独の認識] は経験されるところのものである。そして、数などは一般的な形でも認識されない。同様に、接辞だけから決して基体の意味の認識は得られない。そして、文脈などがなくても、文法学によって植え付けられた潜在印象を有している者たちは、[接辞] 自身の意味を想起する。」<sup>179)</sup>

我々の言語的な認識経験に徴して {pacati} の基体と接辞を「不特定表示語」とみなすことはできない。したがって、基体あるいは接辞が <行為> と <行為主体> のいずれをも表示すると仮定することは許されない。このような場合、{pacati} に関して、基体と接辞にはそれぞれ固有の意味が配当されるべきであり、上記方法の有効性は疑い得ないものなのである。

#### 追加参照文献略号

Cardona, George. [1967-68] “Anvaya and vyatireka in Indian grammar.”

*Adyar Library Bulletin* 31-32 : 313-52. [1981] “On reasoning from anvaya and vyatireka in early Advaita.” In *Studies in Indian philosophy*, pp. 79-104. Ahmedabad : L. D. Institute of Indology, 1981.

- 小川英世. [1984] 「kriyāviśeṣaṇa について」『印度学仏教学研究』第33巻第1号 [1985] 「意味制限と接辞制限—文法学派における「制限」(niyama) の概念」『哲学』(広島哲学会) 第37集 [1991] 「パーニニ文法学派における文の意味」『前田恵學博士頌壽記念 佛教文化學論集』山喜房佛書林 [1993] 「MAMA PAÑINEH」『渡邊文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』(前田恵學編) 永田文昌堂

## 注

- 143)  $\sqrt{kr} + \dot{S}a$  (P3. 3. 100),  $\sqrt{kr} + yaK + \dot{S}a$  (P3. 1. 67),  $k - ri\dot{N} + yaK + \dot{S}a$  (P7. 4. 28),  $k - ri\dot{N} + yaK + \dot{S}a + \dot{T}aP$  (P4. 1. 4, 6. 1. 101) → 〈kriyā〉
- 144) ナーゲーシャは、当該の *sāmānādhikarānya* が〈同一対象指示性〉ではないことを注記している (Uddyota : *ekārthabodhakatvaṃ sāmānādhikarānyaṃ na prakṛte*)。バルトリハリによれば、言語理論における *sāmānādhikarānya* は基本的にはことばのレベルと意味のレベルから2種に分けられる。ことばのレベルで成立するそれは、2項目が同一の対象を指示するという関係であり、意味のレベルで成立するそれは、2項目のそれぞれの意味が基体を同じくするという関係である。Cf. VP111, vṛtti, kk. 21-22.
- 145) Uddyota : *tatra yo vyāpārasāmānyavācī tadviśeṣāḥ pacādayaḥ, kiṃ karotīty asya ca yat karoti tat kim iti vyāpāraśeṣaviśeṣayaḥ praśno 'rthaḥ. evaṃ ca yan- niṣṭhatayā praśnaviśeṣakriyāyāḥ karotiśabdavācyāyāḥ pratitit tanniṣṭhatayai vottarabhūtapacatiśabdavācyakriyāyāḥ pratitir iti tayoh sāmānādhikarānyaṃ, tatra kriyāpraśnajanakajijñāsāyās tadviśeṣayottareṇaiva nirāsād eṣāḥ kriyāvācītvam iti bhāvaḥ.*
- 146) Cf. Mbh ad P3. 1. 19 : *karotiś ca kriyāsāmānye vartate ; Mbh ad P3. 1. 40, 3. 3. 18 : kṛbhastayaḥ kriyāsāmānyavācīnaḥ, kriyāviśeṣavācīnaḥ pacādayaḥ.*
- 147) Uddyota : *tathā ca dhātulakṣaṇe kriyādvāpyānyataravacanatvaṃ vivakṣitam iti na doṣaḥ.*
- 148) Mbh ad P5. 3. 66 : *yat kriyāṃ pṛṣṭas tinācāṣṭe—kiṃ devadattaḥ karoti, pacatīti. dravyaṃ pṛṣṭaḥ kṛtācāṣṭe—kataro devadattaḥ, yaḥ kāraḥ [yo] hāraḥ iti.*
- 149) Pradīpa on Mbh ad P5. 3. 66 : *karotir atra kriyāsāmānyavācīnaḥ. tatra*



viśeṣaparijñānāya kiṃśabdaḥ kriyāviśeṣaṇaṃ pravartate, kriyāviśeṣaṇatvāc ca kim ity etadvittiyāntaṃ napuṃsakam ca / prakaraṇādīvaśac ca kriyāpraśnavagatiḥ. guṇadravyaviśayasyāpi praśnasya sambhavāt, —vāyakaḥ kiṃ śuklaṃ vastraṃ karoty atha kṛṣṇam, tathā kiṃ śātakam karoty atha prāvārakam iti.

150) Sīradeva 54, Haribhāskara 56, Nīkakaṇṭhadīkṣita 134 は単数の数規定を加える。なお、「dhatu」の表示対象を〈結果〉とそれをもたらす〈ハタラキ〉という二つのアスペクトから捉えるナーゲーシャは、kriyāviśeṣaṇa としての {kim} を、その意味は〈結果〉に対する限定者ではなく主要なるものである〈ハタラキ〉に対する限定者であるという理由から、主格接辞で終わる項目 (prathamānta) とみなす。Uddyota on Mbh ad P5. 3. 66 : prathamāntam iti vaktuṃ yuktam, phalaviśeṣaṇatvābhāvena mukhyavyāpāraviśeṣaṇatvena ca karmatvāprāpteh.) この点も含め kriyāviśeṣaṇa については、小川 [1984] を参照せよ。なお {kim} は〈目的〉そのものであろうと kriyāviśeṣaṇa であろうと文法的には次のように説明される。〈kim〉+am (P2. 3. 2, 1. 4. 22), 〈kim〉+φ (P7. 1. 33) → {kim}

151) 文 {kimdevadattāḥkaroti} から得られる認識をパラフレーズによって示せば、「欲知の対象である、デーヴァダッタを〈行為主体〉とする〈行為〉」ということになる。Uddyota on Mbh ad P5. 3. 66 : jijñāsāviśayā devadattakarṭṛkā kriyeti bodhaḥ. √kṛ の意味を生起をもたらす〈ハタラキ〉 (utpattyanukūlavāpāra) ととった場合には、{kim karoti} は「彼は何を生ぜしめているの」という意味となり、この場合には {kim} を kriyāviśeṣaṇa と解さなくても、文脈からこの生ぜしめる〈ハタラキ〉の〈目的〉が〈行為〉であることが十分に理解され得る。このような場合、{kim karoti} は {kāṃ kriyāṃ nirvartayati} (「彼はどんな〈行為〉を実現せしめているのか」と等価である。Pradīpa on Mbh ad P5. 3. 66 : kecit tu kriyāpraśne 'py abhūtataḍbhāvavacanam karotiṃ manyante. kim karoti kāṃ kriyāṃ nirvarttayatīty arthaḥ. なお、Kāśīka ad P8. 1. 44 は、〈行為〉についての質問 (kriyāpraśna) として、〈能成者〉についての質問 (sādhanapraśna) と対比的に次のような例を挙げている。kriyāpraśna : {kim devadattāḥ pācati āhosvit bhunkte} (「デーヴァダッタは料理をしているのか、それとも食べているのか」) ; sādhanapraśna : {kim devadattāḥ odanam pacati āhosvic chakam} (「デーヴァダッタは粥を食べているのか、それとも野菜か」)

152) Cf. Uddyotana on Mbh ad P1. 3. 1 : suṣuptāv apy ucchvāsādivyāpārasattvāc cetanasya vyāpārahitakālo nāstīty arthaḥ.

153) P1. 4. 59 upasargāḥ kriyāyoge 「[ganapāṭha 中の] 〈pra〉ではじまる一群の「nipāta」と呼ばれる項目(←P1. 4. 56 ; 58)は、〈行為〉と結びつくとき、「upasarga」と呼ばれる。」

154) Uddyota : upasargapratyayayor ity asya tadviśiṣṭayor ity arthaḥ.

- 155) Uddyota : arthavattvam iti. anvayavyatirekābhyām iti bhāvaḥ. 意味配当の方法 anvaya · vyatireka については、Bhāṣya 1. 4. 1. 7. 3. 1 を参照。
- 156) Cf. Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : avayavamātrād arthagaty-abhāvenāvayavānām arthavattve hetor aprasiddhir...
- 157) Cf. Mbh ad P5. 1. 22 : kevalenāpi pratyayenārtho gamyate. katham. uktam anvayavyatirekābhyām.
- 158) Mbh ad P1. 2. 64 : yāvataḥ samayaḥ kṛto na kevalā prakṛtiḥ prayoktavyā na kevalaḥ pratyaya iti. (prayoganiyama [Mbh ad P3. 1. 2] : prakṛtipara eva pratyayaḥ prayoktavyaḥ, pratyayaparaiva ca prakṛtir iti.) Pradīpa on Mbh ad P1. 2. 45 : na veti. anyathāsiddhaḥ kevalasyāprayogaḥ, na kevalā prakṛtiḥprayoktavyā na ca kevalaḥ pratyayaḥ iti niyamāt.
- 159) Mbh ad P1. 2. 64 : na...antareṇa tadvācinaḥ śabdasya prayogaḥ tasyārthasya gatir bhavati.
- 160) Pradīpa on Mbh ad P1. 2. 45 : sā [arthavattā] ca vākyaśyaiva padasya vā kevalasya loke prayujyamānasyopapadyate, na tu prakṛtibhāgasya kevalasya prayogābhāvād varṇavad avyavahāryatvāt.
- 161) 「dhātu」提示 : √as + φ (ŚaP-IUK ; P2. 4. 72) + ŚtiP → <asti>, √hū + ŚaP (P3. 1. 68) + ŚtiP → <bhavati>, √vid + ŚyaN (P3. 1. 69) + ŚtiP → <vidyati>.
- 162) dhātupāṭha II. 56 {Is a bhuvi}, I. 1 {bhū sattāyām}, IV. 62 {vidā sattāyām}
- 163) Vedavrata, Nirṇayasāgar : *paktiḥ* pacanam pāka iti, Kielhorn : *paktā pacanam* pāka iti, Ratnaprakāśa : *pacati paktā pacanam iti*. √pac + KtiN (P3. 3. 94) → <pakti> ; +Lyuṭ (P3. 3. 117) → <pacana> ; +GHañ (P3. 3. 18) → <pāka> ; +trC (P3. 1. 133) → <paktr> 接辞の意味の違いを最も明瞭に示すのは Ratnaprakāśa の示唆する読みであるが、ここでは Kielhorn に従う。trC は<行為主体>、Lyuṭ は<手段>、GHañ は bhāva (<行為>) を意味するものとする。ナーゲーシャは、当該 Bhāṣya を *pktiḥ pacanam pāka iti* と読み、それぞれの意味の違いを性 (liṅga) の違いに求めている。Uddyota : anyas ceti. liṅgabhedād ity arthaḥ. この場合、どの「kṛt」接辞も bhāva (<行為>) を意味する。
- 164) VP II, k. 169 : na kūpasūpayūpānām anvayo 'rthasya dr̥ṣyate / ato 'rthāntaravācitraḥ samghātasyaiva gamyate // Cf. Mbh ad vt. 15 (Pratyāhārāhnikā 5) ; 小川 [1985] 注(7)。
- 165) Vṛtti on VP II, k. 169 : yadi tarhi yāvat kiñcittulyarūpaḥ tasyaikatvam abhyupagamyate, yāvāms ca bhinno 'rthaḥ sarvo 'sau bhinnarūpanibandhanaḥ prati-jñāyate saty api sambandhyantarābhede...
- 166) Nirṇayasāgar : *anvayavyatirekābhyām*. Vedavrata, Kielhorn : *siddhan tv anvayavyatirekābhyām*.

- 167) Vedavrata による補足 : [siddham etat / katham].
- 168) 〈行為主体性〉、〈単数性〉という意味に関しては、それぞれ P3. 4. 69 laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥ, P1. 4. 21 dvyekayor dvivacanaikavacane が考慮される。
- 169) {pacati} に関して措定されるこの〈ati〉は、パーニニ文法学の体系ではさらに vikaraṇa ŚaP (P3. 1. 68) と定動詞接辞 tiP (P3. 4. 78) に分析される。この〈ati〉措定の問題に関しては、小川 [1993 : 243-251] に詳しい。
- 170) Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : evaṃ kalpitānvayavyatirekābhyaṃ prakṛtipratyayavibhāgaṃ tayor arthavattvaṃ ca parikalpya śāstre 'nvākhyānam... (「このように、構想された anvaya・vyatireka に基づいて、基体と接辞の区分とそれらの有意味性を構想した上で、文法学においては [言葉の] 説明がなされている。」)
- 171) Pradīpa on Mbh ad P1. 2. 45 : anvayo 'nugamaḥ. sati śabde 'rthāvagamaḥ. vyatirekaḥ—śabdābhāve tadarthānavagamaḥ.
- 172) ナーゲーシャ [Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45] は「[反論者への問い] だからどうだということか。[反論者の答え]〈有意味性〉の確立はうまくいかない。」というように読む。
- 173) Cf. Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : viśeṣaṇaṃ—viśeṣabodhakapadāntarasamābhivyāhāram.
- 174) Cf. Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : vṛkṣa ity ukte ity asya prātipadikaprayogamātre tātparyam.
- 175) Pradīpa on Mbh ad P1. 2. 45 : yady ekaḥ śabda ekasminn arthe niyataḥ syāt tat etad yujyate vaktum. Cf. VP II, k. 167.
- 176) Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : evaṃ cākṣādiśabde tasmin śabde saty eva tadarthāpratīter arthāntarapratīteḥ, paryāyasthale tasmin śabde 'saty api tadarthapratīteḥ cedṛśāvan vayavyatirekāv anirṇāyakāv iti bhāvaḥ.
- 177) Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : evaṃ ca prakṛtipratyayānyatarasyaiva sarvārthatāstu, anyatarasya sādhutvamātrārthakatvam astu.
- 178) 「不特定表示語」については、小川 [1991] を参照せよ。
- 179) Uddyota on Mbh ad P1. 2. 45 : tvadṛityā hi prakṛtiḥ svārthaṃ pratyayārthasāmānyam cābhidadhāti, tatra vinā prakaraṇādikaṃ kevalasvārthasya bodhaḥ katham api na syāt. dṛśyate tu saḥ, saṅkhyādeś ca na sāmānyarūpenāpi bodhaḥ. evaṃ pratyayamātrān na kadāpi prakṛtyarthabodhaḥ. prakaraṇādyasatve 'pi ca svārthopasthitiḥ śāstravāsanāvātām. これは、基体である「prātipadika」の意味と名詞接辞の意味の配当の問題に関してのものであるが、「dhātu」とその接辞の場合と考え方はまったく同じである。

## A STUDY OF THE MAHĀBHĀṢYA AD P1. 2. 1 (6)

Hideyo OGAWA

### SYNOPSIS (6)

1. 4. 1. 4. The proposed definition for the term *dhātu*: *kriyāvacaṇo dhātuh* is applicable to a specific item like  $\sqrt{pac}$ , which is known to be expressive of a particular action by virtue of the relation of concurrence (*sāmānādhikarānya*) between the meanings of  $\sqrt{kr}$  and  $\sqrt{pac}$ .

1. 4. 1. 5. The objection is made in *vt. 3* (*kriyāvacaṇa upasargaḥpratyayaḥpratiśedhaḥ*): If the above mentioned definition is accepted, then one will have to deny the term *dhātu* to an item composed of a *upasarga* (preverb), *dhātu*, and *pratyaya* (affix) by rule. The reason is given in *vt. 4* (*saṃghātenārthagateḥ*): The meaning is understood from their combination.

The point is that on the fundamental premise that meaningfulness results only for what is independently used in common usage, it results only for the combination, which is used to convey a meaning; but for neither a *prakṛti* (base) nor a *pratyaya*, which are not used independently.

1. 4. 1. 6. The objection is raised in *vt. 5* (*astibhavatividyātinām ca dhātu-tvam*): An additional statement should be made that  $\sqrt{as}$ ,  $\sqrt{bhū}$ ,  $\sqrt{vid}$  are called *dhātu*, since they have no relation of concurrence to  $\sqrt{kr}$ .

1. 4. 1. 7. 1-2. The answer to *vt. 3* is given in *vt. 6 A*, B (*pratyayārthasyāvyatirekāt prakṛtyantareṣu / dhātoś cārthābhedāt pratyayāntareṣu*): it is established that both a *prakṛti* and a *pratyaya* are mean-

ingful, and not their complex, because of non-difference (*avyatireka*) of the meaning of the *pratyaya* when there are different *prakṛti-s*; and because of the non-difference (*abheda*) of the root meaning when there are different affixes.

1. 4. 1. 7. 3. 1. In *vt. 61C* (*siddhan tv anvayavyatirekābhyām*) is proposed the method of analyzing a given sound chain into its constituents and attributing given meanings to them, that is, reasoning from *anvaya* and *vyatireka*.

1. 4. 1. 7. 3. 2. The objection is offered: There is no reason to assume that a certain meaning is proper to the *prakṛti*, another to the *pratyaya*, and the *anvaya-vyatireka* method does not work decisively in establishing the meaningfulness in cases where several items denote but one object and individual items have different meanings. The answer to this objection is provided: Even if this were the case, one could not suppose that either a *dhātu* or a *pratyaya* is the expressor of all the meanings ascribed to the *dhātu* and the *pratyaya* since they are not at all characterized by a 'generic term' (*sāmānyasabda*), which requires either an item denoting something specific or a context in order to denote something specific.

(*To be continued.*)